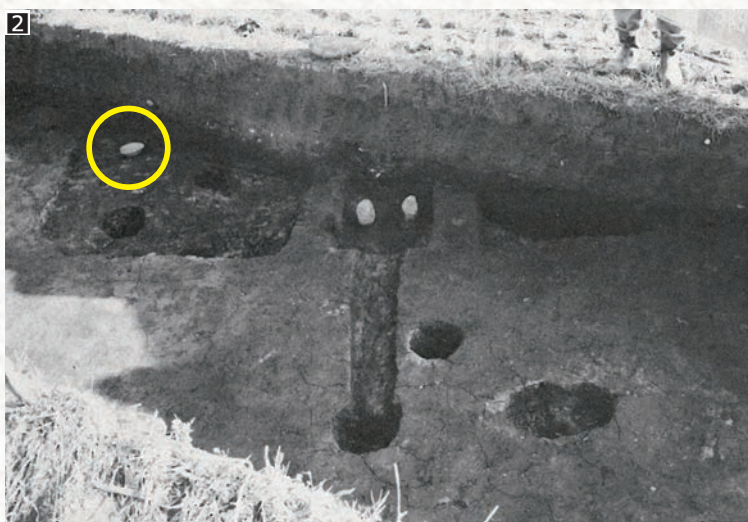




1 須恵器坏型土器。内側を整えるために指や布などでなでて整形されている 2 須恵器坏型土器が出土した住居の写真（調査報告書より）。左上の黄色い丸が出土した坏 3 暗文のある坏型土器。暗文とは、土器に木の棒で放射線状や渦巻き状に磨く整形をすることによってできる模様のこと。出土した土器は、指や布でなでた後に、線を刻んでまねをしたと考えられている

奥州遺産

— ときを越え

受け継がれるもの —

第140回

二本木遺跡の須恵器坏型土器と暗文のある坏型土器

（市指定有形文化財）

胆沢南都田字漆町ほか

国道397号を西へと進み、南都田小学校を過ぎると、道路沿いの大きな松が視界に飛び込んでくる。この周辺に広がる二本木遺跡では、かつて人々が暮らした痕跡が残されていた。

昭和58年の発掘調査で、竪穴住居跡の床の上から2点の土器が見つかった。当初、古墳時代終末期（7世紀末～8世紀初頭）頃の遺物と考えられていたが、後の調査で奈良時代（8世紀）の物であることが判明した。須恵器坏型土器は、作る技術が胆沢地域で普及しておらず、仙台以南から持ち込まれた可能性があり、暗文のある坏型土器は、畿内や関東の土器をまねて作られたと考えられている。

車も鉄道もない奈良時代。二つの土器は、胆沢地域の人たちが、遠く離れた畿内や関東地方と文化交流をしていたことを示す大切な史料となっている。現在は胆沢郷土資料館に展示され、当時の営みの一端をそっと私たちに伝えている。

広告